

平成二十六年第二十四回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

「支えてくれる人がいるから」

菅井 真南 人（小六）

水俣病に苦しむ人が日本に大勢いた。ぼくは知らなかった。水俣病については何も知らなかったのだ。こんな悲惨な病気があったなんて。しかも、医学の進歩がめざましいこの時代に、治らないなんて。そんな絶望的な中、水俣病で苦しむ人たちを命がけで支え、自分の信念を貫いた人がいた。原田先生を、ぼくは心から尊敬する。

ぼくにも、自分を長い間支えてくれている先生がいる。ぼくの主治医の先生だ。五才の時からずっと。ぼくの病名はネフローゼ症候群と言って、じん臓の働きが悪くなる病気だ。この病気とずっと闘ってきた。今も闘っている。治療をしてすぐに治る病気ではないからだ。数値が悪くなるたびに入院しなければならぬ。毎年、必ず入院。それは避けられない。自分でコントロールできないから、入院はいつも突然告げられる。幼い頃は、そのたびに泣きわめいて、母や周りの人を困らせてきた。そんな時、いつも優しくなだめてくれたのが主治医の先生だった。「大丈夫だよ。必ず治るから。先生と一緒にがんばろう！」と、ぼくの目を見て

励ましてくれる。先生はじん臓の分野では、とても力のある先生だと聞いている。だから、この先生を頼って、全国から患者がやって来る。

実際、ぼくと同じ病室には宮崎県や滋賀県から来たという子もいた。今となっては、ぼくより小さい子も多い。三才位の子は、お母さんが恋しいのか、夜に目を覚ましては、よく泣いている。（眠れないよな。かわいそうに）そう思いながら、幼い頃の自分を思い出す。あの頃の自分より、もっと小さい子が、自分と同じ病気で闘っている。毎日のように痛い注射や点滴にも堪え、お母さんに甘えたいのに、一人ぼっちでがんばっている。そう思うと、六年生にもなったぼくが、わがままを言うのは、恥ずかしくなる。先生は、大勢の患者を抱えて、大忙しだと思う。でも一人一人に明るく声をかけ、「元気」をくれる。

長期の入院になると、病院の中で勉強する「院内学級」を勧めてくれる。勉強が遅れないようにということだ。ぼくにとっても楽しみな時間だ。同じ学年の子と友達になれるから。そんなささやかな楽しみも、突然奪われることがある。せつかく友達になれた子が手術を受け、安静にしていなければならなくなるのだ。その子の眠る顔を見ながら、ぼくは思う。（みんなかわいそう。みんな病気と闘っているんだ）と。主治医の先生は、こんなにたくさんの子供達をいつも笑顔で励まし、支えてくれる。ぼくは水俣病患者を支え続けた原田先生と少し重なった。

誰だって、好きで病気になったんじゃない。ぼくだってそうだ。でも、それを受け止め、闘うしかない。支えてくれる人がいるから。

対象図書名 患者さんが教えてくれた 水俣病と原田正純先生

大賞へ、審査員のひとこと

筆者は、「この病気が治る病気ではない」という事が前提となつて、自分の経験と重ね合わせ、「じつじつやって病気と闘つか」という事が大事と感じている。とても、大変だということと同時に、自分が病気によつて育てられている面がこの文章には良く出ている。

この本を読んで、新しく書いたというよりも、本はあくまできっかけであつて、「あつて考えて、へり返り返り考えた事を書いた気がします。長く考えているのだということが良く書かれています。自分の事も客観視して書かれています。とても感動致しました。

受賞者のひとこと

コンクールデビューの四年生の時、最優秀賞という名誉な賞をいただき、ぼくは広島県の表彰会場で夢のような気持ちでステージに立っていました。それがまるで、きのうのこのように思い出されます。あんな夢のような出来事は、もう二度とないだろうと思っていました。

ぼくは、この作文コンクールの作文を書いている途中で入院しました。三年連続、同じ時期です。何とか作文を仕上げたいと思い、今年も病室で書き上げました。電話で、先生にアドバイスをもらいながら、書きま

した。それを母に届けてもらいました。病院から一步も出られなかったぼくにとつて、作文を提出できただけで、達成感でいっぱいでした。

本を読むたびに、いろいろなことを考えます。本を読んで、自分を反省します。本から勇気をもらいます。弱虫だったぼくも、今は少しだけ強くなったように思います。持病のある自分を不幸だと思うことはやめました。これから先、どんなに苦しいことがあっても、ぼくは前を向いて進んでいこうと思います。

このような名誉な賞をいただき、本当にありがとうございます。

小学生低学年の部・最優秀賞(小三)

記念すべき日に

寺 久保 真 希

始業式の日、自己紹介の時にあくしゆの代わりに、生徒たち一人ひとと腕ずもうをした山下先生。いかにも頼りになる感じの先生です。この先生が担任で良かった！私はすぐに山下先生のファンになりました。

山下先生のはげましがあつたから、ジュンは最後までトレーニングをがんばれたのだと思います。腕ずもうで勝ちたい！強くなりたい！ジュンは、そう思いながら練習をしたのだと思います。目標を持つてがんば

ることはとても大切だと思います。

私は、飛び箱が苦手でした。一年生の時は二段までしか飛べませんでした。二年生では三段までしか飛べず、みんなに大きく差をつけられてしまいました。たいていの人は五段か六段を簡単に飛んでいたのです。どうして私は飛べないんだろう。体育の時間のたびにゆううつでした。段が高くなると、こわくなるのです。みんなはよく平気だなあと、うらやましくなります。楽しそうに飛んでいる人を見ると、よけいに気持ちが悪くなりました。

三年生になって、このままではいけないと思うようになりました。出来ないからと逃げてばかりいたら、このまま永遠に出来ないまま……。私は早めに体育館に行つて練習を始めました。やはり少しぐらいの練習では、すぐには飛べるようになりません。あきらめずに何度も早めに行つて練習をしました。私の場合、ジュンのように教えてくれる人がいなかったのです、一人で練習するしかありませんでした。実は以前、休み時間には友だちと鉄棒の練習をしていた時、友だちが足をふみはずして骨折し、病院に運ばれたことがありました。それを見ていた私は鉄棒だけでなく、飛び箱までこわくなってしまったのです。

だから、気持ちがとても大切だと思います。がんばつてみようと思わなければ、何も変わらないからです。飛び箱を飛べるようになりたい！ そう思い、「こわいー！」という気持ちをふりはらいました。そうして、ある日、いつものように、「ピーッ！」というホイッスルで私は走り出しま

した。思いきり助走をつけ、手を置く位置を手前ではなく、少し遠くに付けました。そしたら何と飛べたのです。この日は、私にとっては、記念すべき日になりました。

次の目標は、五段です。「ネバーギブアップ！」すごくいい言葉だと思います。

対象図書名 ネバーギブアップ！

受賞者のひとこと

私はこの春に入塾したばかりの新人です。その私が、このような大きな賞をいただけるなんて、考えてもいませんでした。私の名前が呼ばれた時は、ただもうびつくりで、言葉が出ませんでした。

私が自慢できることは、本が大好きで、毎日読書を欠かさないということです。読書は私の生活になくてはならないものになっています。学校では、一年間の読書量が毎年、私が一番になっています。本を読んでいる時間は、私にとって何よりも楽しい時間なのです。

本にばかり夢中になっていく私に、母は困っていたようでした。もっと他のことにも興味を持ってほしいと思っていたようでした。でも、セミナーに入塾する時、先生に、「すばらしいことです。好きなだけ読ませてあげてください。」と言われ、母は考え方が変わりました。おかげで、私は思いっきり本を読めるようになったのです。

今までは、読書を楽しむだけで終わっていたけれど、今回作文を書いてみて、文章を書くことも楽しいと気づきました。

小学生の部・最優秀賞（小四）

手紙の力

吉野 愛里珠

手紙の良さは、自分が体験するとよく分かる。花音が文通を始めて、手紙の良さに気付いたように、私も、転校した親友と手紙のやりとりをするようになって、手紙の力はすごいなあと思うようになった。

私にとって一番仲のいい友だちが、ある日突然、引越すことになった。それも一週間後と言われた。その時、私は何が何だか分からなかった。「うそ！うそでしょ？」そう言わずにいられなかった。親友は静かに首を横に振った。引越しをするということは、転校するということでもあった。今まで、だれよりも一緒にいる時間が長かった友だち。一緒に遊んだり、笑ったり、だれよりも気の合う友だち。お互いに悩み事も相談し合ってきた。その親友がいたから、学校生活も楽しかった。それは、これからもずっと続くものだと私は思っていた。

転校を知らされたその日、私は家に帰ってからも、そのことばかり考

えていた。ため息ばかり出てきて、夜も眠れなかった。どうしよう。これから私はどうしたらいいんだろう。さみしくて不安でたまらない。考えている内に私を一人ぼっちにする親友をうらめしく、思うようになっていた。

次の日、学校に行つて親友の顔を見ても、今までのように仲良しの態度ができなかった。（行くなら、さっさと行けばいいじゃん。）そういう気持ちでいっぱいだった。ほとんど口をきかなかった。ほとんど笑わなかった。その日一日、本当につまらなかった。家に帰ってからも、気が重いままだった。親友とおしゃべりができないと、こんなにつまらないんだ……。その親友があと六日で遠くへ行ってしまう。大切な六日間を、口もきかないつまらない六日間にしてもいいのだろうか。頭の中でぐるぐるといろんな考えが回っていた。そうして、私の中ではつきり分かったこと、それは、親友がいたからこそ私も楽しく過ごせたということ。いい思い出もたくさんできたということ。残りわずかな時間を大切にしなければと思い、次の日から私は今まで以上に親友とたくさんおしゃべりした。

お別れの日、親友は思いがけないことを言った。「私、手紙書くから！」と。親友はケータイを持っていない。正直、私はケータイがあれば便利なのにと思った。

でも、一通目の手紙が届いた時、私は感動して何度も何度も読み返した。転校が決まってつらかったのは親友の方だった。私を大切な存在に

思ってくれていること。いろんなことが分かった。あの時の私の態度をちゃんと謝らなければ！私も手紙を送った。離れていても気持ちは変わらない。手紙の中でおしやべりが弾む。手紙の力つてすごい！なぜなら私たちは今も、親友どうしだから。

対象図書名 ひみつの花便り

受賞者のひみつ

みんながすすら書いてるのに、今回、私はなかなか進まず、考えてばかりでした。書いては消す、そのくり返して、みんなと差が開くばかりでした。あせていた時、先生の「手紙を書いたり、もらったりしてうれしかったことの一つや二つ、あるでしょ？」というアドバイスに、パツとひらめきました。そうだ！転校していった友だちのことを書こうと。親友との別れは、私の生活が大きく変わるくらいの出来事でした。その時の気持ちがよくえってきて、書きたいことがあふれるようになってきました。何とか書き終えることが出来た、それだけで達成感でいっぱいでした。

まさか、こんな大きな賞をいただけるとは思っていませんでしたので、とてもうれしいです。「ひみつの花便り」を読んで、改めて手紙のすばらしさに気付いた私は、今回の受賞のことも手紙に書きました。親友は「おめでどう！よかったね」と、自分のことのように喜んでくれました。

先生や家族だけでなく、友だちにも祝福され、うれしきでいっぱいです。

小学生の部・最優秀賞(小五)

まだぼくは終わらない

阿部 紘季

悔しいという気持ちは、つぎに進むためのパワーになるとぼくは思う。腕ずもうで負けてばかりいたジョンだって、悔しくてたまらなかつたにちがいない。その悔しさが、「続ける力」につながったのだと思う。

ぼくの場合、「走ること」だ。ジョンと違って苦手ではない。むしろぼくは、走るのが好きだし、速さにも自信がある。今までずっと、学年で五〜六番の順位をキープしてきた。

今年四月、また足の速さを測定する時がやってきた。運動会の前に、五十メートル走で全員のタイムを計る。そのタイムによって、運動会当日、一緒に走るグループが決まる。公平にするためだ。この測定の日、ぼくは上位集団の中で走るようになった。ぼくより速い人たちがばかりだった。練習といっても緊張が走る。みんな本気だ。ぼくも負けてられない。今までより順位を上げたかった。(よし！速く走るぞ！) 気合いを入

れた。あつという間に終わった。結果は六人中、六位。つまりビリだった。いくらトップ集団の競争と言っても、ぼくは悔しかった。ビリというのはたえられなかった。このままだと、運動会本番でもビリはぼくということになる。それは絶対いやだ！この悔しさを忘れるな！そう自分に言い聞かせた。

その日からぼくのトレーニングが始まった。ぼくは自分に誓いを立てた。「毎日必ず練習する」「絶対に弱音を吐かない」——この二つだ。毎日公園でスタートダッシュの練習をした。心の中で（よい、ドン！）地面を思いきり蹴る。ぼくはこれまでの経験から、スタートダッシュが勝負のカギになることを知っていた。だから、自分でも納得のいくまで練習した。次に脚力を鍛えるために、階段ダッシュ。マンションに住んでいるぼくにとっては好都合だった。エレベーターを使わず全力で上り下りをやった。ジュンと同じ、ぼくも強くなりた一心だった。山下先生のようなコーチがいたら、もっと効果的な練習法を教えてくださいませんか。それ以上は心の支えとして大きな存在になっただろう。ぼくは正直、孤独な戦いだった。

運動会当日。あの時と同じ顔ぶれだ。ぼくより強かった五人と走る。さすがに本番は、みんなの気迫を感じた。ぼくは大きく深呼吸をした。スタートダッシュが上手くいった。すぐにインコースに寄せた。全力で走る。だれもが全力で走った。結果、ぼくは四位だった。友だちが驚いていた。お母さんもほめてくれた。でも、ぼくは三位までに入りたかつ

た。賞状のタイトルが違うのだ。四位は「努力賞」というタイトルになる。また少し悔しさが残った。

やれば出来ることを自分で証明した。確かに、今のぼくの実力は四位だ。でもぼくは、このままでは終わらない！絶対に！

受賞者のひとこと

対象図書名 ネバーギブアップ！

「重大発表！」と言う先生の言葉に、教室が静まりました。「最優秀賞」にぼくの名前が呼ばれた時、「本当に、ぼく？」と、自分の耳を疑いました。なぜなら、ぼくは作文が苦手で書けないということ、国語専門塾に入ったからです。そんなぼくが、いつの間にか作文を書くことが楽しいと思うようになっていました。しかも、最優秀賞に選ばれるなんて、本当に夢のようです。ぼくは、あまりのうれしさに、目がうるうるしていました。

今回の課題図書は迷うことなく、「これだ！」と、すぐに決めました。読んでみると、自分の体験と重なるところがあって、どんどん引き込まれていきました。「ネバーギブアップ」の精神はいつもぼくの中にあります。特に、自分の得意なものでは負けたくないという気持ちが強くなります。今回、この本を読んで、その気持ちがあります。強くなりました。読書や作文の楽しさを教えて下さった先生に、ぼくはとても感謝しています。

小学生の部・最優秀賞（小六）

「未来につなぐ」

枝 木 颯 佑

八月の真夏の太陽を浴びて、真っすぐに空を向いて咲いているぼくのひまわり達。

先日の台風が過ぎた後、何本か傾いている花もあったけど、強風や大雨にも負けず、倒れずに無事だったひまわり達を見た時には、生命力や力強さを感じた。

ぼくは今年から、「ひまわり里親プロジェクト」に参加している。それは、東日本大震災のおきた、二〇一一年の五月から始まった活動で、福島から送られてきたひまわりの種を植えて、育て、花を咲かせて、その種を福島に送り返すというものだ。岡山県でも多くの企業や学校が参加していて、その中でも、笠岡湾干拓地には五ヘクタール、約五十万本の、「ひまわりじゅうたん」が広がっている。そして、福島の子供達が観光に訪れたり、交流がともあるそうだ。ぼくは畑に、約百四十本のひまわりを植えている。この活動は、個別では、とても小さな活動かもしれないけど、活動に参加している多くの人達の力が集まって、農地再生や観光、雇用、そしてエネルギーを生み出している。何よりも大切な

は、震災の被害や悲しみ、犠牲になった人々を忘れないことだ。

庄九郎の藍染めが日本中に広がり、そして、今でも世界中に広がっている様に、一つぶの種を通じて日本全国がつながり、やがて世界につながり、世界中の人々が活動に参加する様になるかもしれない。そうならば、すばらしい事だと思う。だから、小さな行動が段々と大きく膨らんでいって、少しずつでも福島の未来につながり、役に立つ事が出来れば、ぼくはともうれしく思う。

でも、庄九郎も初めから成功した訳ではない。ぼくは今年のキャンプで、生まれて初めての藍染め体験をした。実際に藍染めをしている時に、ふと庄九郎のことが頭に浮かんできた。現代の様に、材料や道具や環境に恵まれた中で先生に教わって作業する事は、そんなに難しい事ではないけれど、庄九郎の時代では、とても困難な事が多かった。農業しかしたくない人達が、試行錯誤した結果、藍染めに出会った。そして、あきらめず挑戦と失敗をくり返しながら、やっと自分達のやり方を手に入れ、それが今日の藍染めの技法や色合い、複雑な美しさを生み出す事につながっている。だから、どんな困難に対しても投げ出さずに立ち向かい、仲間を信じてやり通す事で、過去と現在、そして未来がつながっていくのではないかと思う。

この本と出会った事で、改めて努力する事、あきらめない事の大切さに気付く事が出来た。うまくいかなかったり、難しい事に出会った時、すぐにやめてしまわず、自分を信じ、少しずつでも解決しながら前に進

んでいきたい。そして、できれば庄九郎の様に実行力を身に付けて、まわりから信頼され、人と人、心と心をつなげられる人になりたい。

中学生の部・大賞

希望の架け橋

対象図書名 有松の庄九郎

吉野 愛海里(中二)

受賞者のひょうご

ぼくが家に帰ると、母が「ちょっとそこにすわって」と言った。ぼくはすわって、一瞬とまどったが、すぐに笑顔で母は「読書感想文通ったよ。」と教えてくれた。次々に家族が帰って来て、その度に「良かったね。」と言葉をかけてもらえて、喜びが二倍、三倍にふくれあがった。今年の夏休みは夏期講習もあって大変だったけど、この一つの出来事で、全ての苦勞が吹き飛んだ。

ぼくはひまわりプロジェクトを通じて、テレビや新聞でしか知ることのなかった震災を、少し身近に感じる事が出来た。そして、今回の受賞式が仙台で行われるので、震災のことを学び、みんなに伝えていきたい。

水俣病は、私達が生まれる前の昔の出来事。そう思っていた。でも、違った。今も苦しんでいる人が大勢いる。水俣病は、今も続いている。とても深刻な問題だった。「水俣病」という公害病の名の下で、多くの人たちが身体的な苦痛だけではなく、差別や偏見にも苦しめられてきたことを、私はこの本で初めて知った。そして、知れば知る程、問題が複雑に入り組んでいることに気付く。

一見、水俣病と差別や偏見は無関係に思われる。ところが、とても根の深いものだった。水俣病だと分かると、結婚も就職もできなくなる。水俣病だと分かると、いじめられる。だから「うちの子は水俣病じゃないことにして下さい」——そんなバカな！この人達は何を言っているんだろうと思った。水俣の人までが、「水俣病は終わったこと」にしようとするなんて・・・。それでは何の解決にもならないのにと、憤りを越えて私は切ない気持ちになった。

この時、私は小学校時代のつらい思い出がよみがえってきた。日本人の父と中国人の母との間に生まれた私は、その境遇に誇りを持っていた。

日本で生まれた私だが、母の故郷には祖母がいるので、中国にも頻繁に行っていた。二つの故郷があることが私の自慢だった。その自慢も、小学三年生の時、早くも打ち砕かれてしまった。自己紹介の時、自慢気にそれをアピールしたのが、苦しみの始まりとなった。陰湿な「いじめ」が始まったのだ。靴を隠されたり、机の上にゴミを積まれたり、時には全員に無視されたり。私は訳が分からなかった。なぜ自分はこんな目にあわなければならないのか。その時の私には気付き様もなかった。でもその理由を知るのに、それ程時間はかからなかった。リーダー格の男子がついに言い放った。「中国人は大嫌いなんだ！おまえと同じ空気も吸いたくねえ！」——彼は言いたくてたまらなかったこの台詞を、今だ！と言わんばかりに叫んだ。周りの男子も「オレも！」「オレも！」と加勢する。女子は口には出さないけれど、明らかに蔑みの目で私を見ていた。まだ小学生の私には、これが「差別や偏見」だと気付くことはできなかった。そして、言い返すだけの言葉も見つからなかった。「中国人が嫌い」と言われたら、何と言いつ返せば良かったのだろう。正直、今でも分からない。

小学生ながらも、あの時私の中にはつきり芽ばえた感情があった。私は何を言われてもいい。でも私の家族を侮辱する奴は絶対に許さない！！そんな頑な気持ちになっていた。それ以来私は、自分の素性については口を閉ざすようになったのだ。

だから、水俣病で差別や偏見を受けてきた人たちの苦しみやつらさは、

とてもよく分かる。あの人たちは何も悪いことをしていない。それどころか被害者であり犠牲者なのに、なぜそんなひどい目にあわなければならないのか。つらい目にあうのは、いつも弱い立場の人たち……。それではあまりに理不尽だ。正義感から患者を捜そうとした川本さんも、邪魔扱いされ、私のようにいやがらせを受けた。いや、私とは比べものにならない程、ひどいものだ。夜中に壁をけられたり、火をつけられたり、「死ぬ」と言われたり。同じ土地にいながら、困っている人に手を差しのべるどころか、よくこんなひどい仕打ちができるものだ、あきれ

る。

人の感情というのは、ひとたび暴走するととんでもない方向に行ったりする。私のように、国家や民族、歴史などが絡んでくると、子どもまでがそれを振りかざし、差別や偏見が拡大していく。中二の今の私には、少なくとも中国という国を客観的に見ることはできる。確かに、中国は何かと世の中を騒がせている。さまざま問題を起こし、その度に批判されている。日本との関係も決して良好とは言えない。急激な経済発展に中身が追いついていない。実際、中国に行くと、経済格差を目のあたりにし、がく然とする。モラルという点でも、確かにほめられたものではない。

だからといって、個人に敵意を向けるのはまちがっている。差別や偏見はいつの時代にも、どんな世界にもあるかもしれない。でもそこから

力を養っていかねばならない。

私にとって、もう一つの故郷「中国」を大切に思う気持ちは変わらない、日本人の父と中国人の母との間に生まれた自分を誇りに思う気持ちは変わらない。今もこれからも。

私は将来、日本と中国の架け橋になるような仕事に就こうと考えている。

対象図書名 患者さんが教えてくれた 水俣病と原田正純先生

大賞へ、審査員のひとつ

訴える力があり、大変感心致しました。

水俣病の本から作文を書いています。自分が中国人の母親と日本人の父親の混血であるという事と重ねて、それを差別の問題として書かれている点はとても良かった。

実際の経験(今まで何でもないと思っていた事が、今では言えなくなってしまう)を通して、個人に敵意を向けるのは間違っている—という訴える力は非常に迫力がありました。

個人の問題と国の問題をとても良く考えている事に強い印象を受け、またとても感心しました。

受賞者のひらひら

水俣病の実態を知り、「差別や偏見」という観点で書いてみました。こ

の本を読んで、私にとって封印しておきたかった過去のこと、よみがえってきました。それを先生に話したら、辛かった過去を書く勇氣や覚悟はあるかと聞かれ、正直迷いました。周りの人達にどう思われるのだろうかという不安がまっ先に浮かびました。でも、今のセミナーの仲間達は私の境遇を理解し、ごく普通に接してくれています。むしろ、今は切磋琢磨できる環境の中で、思いきり、自分自身を高めていけるので、私は心から有難いと思える程です。先生の「愛海里は愛海里だから、自分に誇りを持ちなさい」という言葉に、勇気づけられ、小学校時代のいじめの体験を書く決心ができました。

書き終えて、自分自身の心の整理も出来、今までの迷いも吹き飛んだ感じがしました。自分自身と向き合う良いきっかけにもなりました。この本を読んで、これからの自分の生き方についても、深く考えることができました。

今回、背中を押して下さいました先生に感謝の気持ちでいっぱいです。

中学生の部・最優秀賞(中一)

「奇跡」の出会い

西谷 綾華

もし、突然なれない環境の中に入った一人取り残されたらどうだろう。言葉の通じる相手もない。何が良くて、何が悪いのかもわからない。一歩前に踏み出すことさえ困難なのだ。そんな時、私はどうしているだろう。誰かが手を差し伸べてくれることを、ひたすら待ち続けていると思う。その人こそが、その環境の中で初めての友達になれるから。そんなことを思いながら読み進めると、今までに普通のように一緒に過ごしてきた友達が私にとっていかに大切で、どんなに掛替えのない存在かを自分の知らないうちに考えていた。

ある日、急にお互いを良く思っていない相手と二人きりで放牧をすることになったらどうだろう。頭の中には「不安」という言葉しか浮かんでこないのではないだろうか。「自分はこれからどうしていけば良いのか。」と、いう考えが何度も頭をよぎるのではないか。なれた環境に今まで生きてきて、考えたこともないことを急に考えさせられるのだ。私ならとつづくに逃げ出していたかもしれない。でも、その環境によってツトムとパニは新しい友情を手に入れられた。たとえば、二人きりなのにツトムが死にそうなくらいお腹が痛くて、苦しかったらどうだろう。もちろんパニは戸惑うが、すばやい判断と冷静さによってツトムは苦しかったのが嘘のように楽になる。ここでツトムはパニに「助けてくれてありがとう。」という気持ちを伝えたくなり、パニも「無事でいてくれてあり

がとう。」という言葉を掛けたくなるのではないだろうか。それらによって二人の間に友情が生まれたのだと思う。

私には親友がいる。最初は赤の他人だった。でも、国語の授業で「モチモチの木」という本を音読するのにペアになったことがきっかけで「他人」から「友達」、「友達」から「親友」にまでの深い関係を築くことができたのだ。初めはツトムとパニのように「うまく音読できるかな。」と、とても不安に思っていた。しかし、音読発表をクラスの皆に楽しんでもらえるよう、休み時間を潰して一緒に練習していくごとに「友情」という扉が開き今、「親友」という関係が保てているのだ。

次に、ツトムはパニとの友情は築けたもののゴウとはちょっとした「すれ違い」が起きている。だが、ツトムはパニとの出会いによって友情、心の成長、絆をとげたのだ。私の予想では、ツトムとゴウの友情を取り戻させるためにパニとツトムは出合ったのではないかと思う。

この「友達とのすれ違い」は私も経験したことがある。「モチモチの木」で一緒に音読してから二年たった時、それまでずっと同じクラスだったのに離れてしまったことがある。けんかをするのは、一度もなかったのだが、違うクラスになったからか会う機会がなくなってしまったのだ。久しぶりに会っても何と声を掛けたら良いか分からず、そのまま話すことがなくなってしまったのだ。そんな日が何日かたったある日、親友とこのごろよく話している友達が私の方へ駆け寄ってきて、親友の私への思いをこっそり教えてくれたのだ。それは「私にはやっぱり彼女がいな

いとだめだ。」という一言だった。その言葉を聞いて私は親友の所へ走った。そして、お互いの気持ちをお互いにつけ合ひ、元の関係に戻ることができた。もしかすると、その親友の心情を教えてくれていなかったら、私には今「親友」という存在がいなかったかもしれない。

私はこの本と経験を通して、「友達」は自分と相手が一緒に築きあげていくものだということ。そして、周りの友達の手助けがあったからこそ親しい関係を保っていることを改めて感じた。今は「親友」であつてもどちらかが存在していなかったり、違う世代に生きていけば今のようない関係はこの世になかったのだ。だから私は「ぞつ」とする。しかし、本当にこの世で出合っているのだ。パニとツトム、私と親友も、もちろんよほどの縁がなければ出合えていなかったことをしみじみ思った。さらに私はこのような縁を「奇跡」だと初めて思った。この本を読んで私もツトムと同じように友達や絆に気づくことができたと感じる。やはり「友達」とは今までも、これからも、生きていくうえで必要なかけがえない存在だったのだ。

受賞者のひとこと

対象図書名 ともだちはサティー！

私は作文コンクールで「最優秀賞」という賞がいただけるのは夢にも思っていませんでした。今までの苦勞が実ったように感じます。また今回の出来事が「奇跡」のようにも思えました。私を見守って下さった家族や先生方が支えて下さったからこそこの賞だと思えます。先生方に出会

えていなければ今回いただいた賞がこの世にあることさえ知らなかったかもしれないのです。

私には将来の夢があります。この将来の夢を叶えるためには奇跡もなにと私の手には入りません。でも夢をかなえるために周りの人々とかかわりを大切にし、おこせる奇跡ならどんなことでも遣り遂げることが今回の作文コンクールで学びました。

中学生の部・最優秀賞(中二)

困っている人から学ぶ意味

国 清 彩

「どうせ治らんから来ないで」。患者さんのこの言葉が原点だという。

私は、水俣病研究の第一人者、医師・原田正純先生の生き方に、大きな希望と勇気をもたらした。

「治るなら、注射や手術をすればいい。でもね、治らない病気だからこそ、やるべきことがたくさんあるんです。手をにぎったり、話を聞いたり。ただ、じつとそばにいるだけのこともありました。実際はなんの役にもたてんよ。それでも、『いざというときは、あの人に相談すればいい

い』というね、そんな役割が医者にはあるんです。まあ、お地藏さんみたいなもんかな。話をするうちに、患者さんが自分で答えを見つけたり、なっとくしたりすることがあったんです」(123頁、124頁)

これが先生の患者さんへの寄り添いだった。人が愛おしく、人を慈しみ、同じ人として、自分ができることを、笑顔でそっと、そして精一杯やる。先生の信念なのだ。

「一番の専門家は患者さん」。これも先生の信念。先生は、「加害企業や国家と被害者の圧倒的な力の差から『本当の中立は弱い立場に立つこと』と信じ、数々の訴訟で患者側に立って証言した。『被害者側に立ちすぎる』との批判には、『医学は患者のためにある』と一蹴した」(朝日新聞／二〇一二年六月二三日)

私は小学五年の時、授業で水俣病問題を学んだ。担任の先生が見せてくれた白黒ビデオに一匹の猫が現れた。まっすぐ歩けず、グルグル回り、しばらくして倒れ、動かなくなつた。みんな、画面を見つめたまま何も言わなかった。理解できなかつたからではない。みんな、原因はチツソが不知火海に垂れ流した有機水銀で、汚染魚を食べたからだと知っていた。でも、怖くなって声が出なかつた。猫と同じように、私と同じ人間が、苦しみ、差別され、動けなくなるといふ現実が怖かつた。

ユージン・スミスさんとアイリーン・スミスさん。二人は、一九七一年から水俣で暮らし、写真を撮り、水俣病問題を世界に発信した。彼らの写真集に、胎児性水俣病の一三歳の智子さんをお母さんがお風呂に入

れている写真がある。智子さんの体はやせて、手は曲がって変形している。お母さんに抱かれた智子さんはまっすぐに上をみて、お母さんは智子さんを見つめて優しく微笑んでいる。私は智子さんやお母さんは、国やチツソ、あるいは、差別する市民に対する恨みや怒りはないのだろうかと思ひ、複雑な気持ちになつた。いや、そんな感情がないはずがない。でも、そのお風呂の写真は、おだやかな親子の風景なのだ。

写真の意味を、この本に教えられた。「智子はわが家の恩人なんです。わたしが食べた毒をひとりですいとつてくれた。おかげで、わたしもこの子の妹も弟も、みんな元気。ほんとうに宝のような子なんです」(93頁)

私は思つた。であるなら、私は水俣病の人たちやご家族に感謝しなければならぬ。彼らはそうして日々を送り、生き抜き、私たちにこの問題の過ちを教えてくれているからだ。

私は、学校でボランティアと人権・平和の学習をするクラブに所属している。クラブは8年間、岡山県のハンセン病療養所長島愛生園で、入所者の方々と交流を続けている。

国は、「らい予防法」によって、終生絶対隔離を強制し、患者(治療すれば元患者)さんとご家族を苦しめてきた。差別は国によってつくられたのだ。元患者の方々は、その人権侵害に対して、「らい予防法」は憲法違反だと国を訴えた。そして、水俣病の裁判と同じように、国と闘い、勝訴を勝ち取つた。

私はハンセン病問題から、責任は私たち市民の側にもあるということ

も学んでいる。国や大企業など、力を持った者の言うことを鵜呑みにし、「おかしい」と言えず、あるいは、気づいても言わず、傍観者でいることは結局、国がつくった差別に荷担したという視点だ。

福島の原因事故も同じではないか。現在も¹3万人が避難生活を強いられている。国が宣伝した「絶対安全神話」を鵜呑みにし、それに異議を唱えなかった私たち市民は、放射線被害におびえ、悲しむ人々に対して加害者となったのではないかと、私は思う。

「みんながあの子を嫌っているから、わたしも・・・」。そんな愚かな自分に出会ったことがある。孤独を恐れて周りに流される自分。

原田先生は違う。社会的弱者の側に立ち、困っている人から学ぶ姿勢を貫いた。

私は、一人の人間の力は弱いから、仲間と連帯することが大切だと信じている。ただ、まずは「一人」が、おかしいことはおかしいと声を上げなければ、何もはじまらない。原田先生はその「一人」だった。

私は、先生のように、差別の連鎖を断ち切る「一人」になりたい。目の前の困っている人を大切にし、愛し、学び、孤独を怖れず、それは間違っていると勇気をもって声を上げることができる、そんな人になりたい。

受賞者のひとこと

このたびは、このような賞をいただきありがとうございます。

私は学校で、ヒューマンライツ部という、ボランティアと人権・平和に関する調査、研究をするクラブに所属しています。クラブ活動の中で、様々な「社会的弱者」と呼ばれる方々に出会い、『人が生きる意味』や『命の尊さ』を学んできました。この作文もその中で生まれたものです。

正直、今まで水俣病問題について真剣に考えたことはあまりありませんでした。この本と出会ったことで、遠い歴史だと考えていた水俣病問題が、より身近なものに思えました。同時にもっとたくさんの方のことを学んでいかなければいけないと痛感しました。

「傷ついた方に寄り添い、その人から学び、伝えていく」。これは、原田先生の生き方から学んだことです。そして私の決意でもあります。

中学生の部・最優秀賞(中三)

真の「平和」を信じて

箱島 平和

対象図書名 患者さんが教えてくれた 水俣病と原田正純先生

マララが銃撃された二〇一二年、僕も病院にいた。その理由も状況も

あまりに違い過ぎるのだが……。マララのこの事件を、僕は病院のテレビで知った。ただ、「勉強がしたい」と願った少女が撃たれた。「教育の権利」を主張しただけで撃たれた。それも、まだ十五歳。僕と大して変わらない年齢だ。この事件は、当時の僕に大きな衝激を与え、生き方を変えるきっかけとなった。

小学三年から柔道をやっている僕は、その日もいつものように練習していた。何もかも普段通りだった。ただ、睡眠不足で今ひとつ本気になれずにいたことを除いては。(まあ、何とかなるさ)と、軽く考えていた。指導者は、そんな僕のいい加減な気持ちを見抜いて、何度も注意する。「何をやっているんだ！ちゃんと集中しろ！」と。僕は返事をするものの、いっこうに気合いが入らず、だらけた気持ちのままだった。(もう少しで終わる) そう思った瞬間、僕は投げ飛ばされ、同時に腕の骨が折れる音がした。今まで味わったことのない激痛が走った。

そうして、僕は入院するハメになった。数本の骨折。靭帯まで切れていた。手術の必要があると告げられた時、僕はあまりの恐怖に絶句した。手術を「する」「しない」の選択権は僕にはなかったのだ。恐怖に怯えながら手術までのカウントダウンが始まる。柔道は危険なスポーツだと知っていたはずなのに。少しの油断が大ケガにつながり、時には「死」を招くこともある。そんな話は何度も聞いていたし、頭では分かっているつもりだった。まさか自分がその体験者になろうとは……。後悔してもしきれなかった。

手術は何とか無事に済んだ。でも、それで終わりではなかった。本当の闘いはそこからだったのだ。ギブスでの生活があまりに長かった為、腕が全く動かなくなっていたのだ。そう、全く機能しない腕……。僕はどん底に突き落とされた。元に戻す方法はたった一つ、「自分次第」と言われた。

その日から、リハビリの毎日が始まった。専用の施設でリハビリに励む。なかなか思うようにいかない。スポーツをしていた僕にとって、体を自由に動かせないつらさは「屈辱」だった。自分が頑張れば、すぐに回復するだろうと考えていたが甘かった。一ヶ月経っても成果が出ないのだ。(何でだよ！こんなに必死にやってるのに！努力しても、これっぽっちか！) 焦るばかりだった。リハビリも一段ときついものになった。専用の機械に腕をはめ、曲がらない自分の腕を強制的に動かす。その時の痛さは半端ではない。僕はその痛さに堪えきれず、何度も悲鳴を上げる。五分が限界。まるで拷問だ。頑張るにも限界はある。「もう、やっつけられないっ！！」今まで張りつめてた糸がついに切れた。僕はリハビリを放棄したのだ。やっても変わらないなら、やらない！痛い思いをするだけ損だ！そう思い込んだ僕は、ぬけ殻のようになってしまっていた。「自分でリハビリを続けないと治らないでしょ！」としつこく言う母の言葉も無視した。誰が何を言おうと僕は聞く耳を持たなかったのだ。孤独だった。自分ほど不幸な人間はいないと思い、塞ぎ込む一方だった。

そんな時報道されたのが、マララ銃撃事件だった。教育の大切さを訴

える、勇気ある少女。マララについてはその程度しか知らなかったが、

その少女がなぜ撃たれなければならないのか。僕はテレビに釘づけになった。パキスタンという、遠く離れた国では、とんでもない事が起きている。マララは今頃生死をさまよっているのだろうか。十五歳位の子は、日本なら勉強や部活、友だち付き合いなどで楽しい毎日を過ごしている。それができないで、投げやりになっている自分みたいなものがあるが・・・今の自分はマララにはどう見えるのだろうか。「カッコ悪すぎ」の自分を心から反省したのだった。急にリハビリに精を出した僕に、母はとても驚いていた。

世界のあちこちでテロや戦争が起きている。勉強がしたくても学校に通えない子供が大勢いる。誰もが平和を願っているのに実現しない。僕は今までずっと、「平和」という自分の名前が嫌だった。初対面では必ず何か言われるし、友だちにもからかわれてきた。もっと普通の名前をつけてくれたらよかったのに。そう思いながらも、名前の意図を親に聞けなかった。正直、聞くのが怖かった。あまりにも壮大な願いが込められているような気がして。それを背負うのは荷が重すぎて。自分一人の心の「平和」さえ維持できない今までの自分は、完全に名前負けしていた。今、僕はあの時のマララと同じ十五歳。これから世の中を自分の目で見つかり見て、今、何をすべきかを考えられる自分になろうと思う。ぼくは十五歳にしてようやく自分の名前を背負う覚悟ができた。

受賞者のひとこと

小学六年生で入塾した僕にとって、セミナーの環境はとても刺激的だった。先輩たちの作文のレベルの高さに圧倒されながら、一步でも近づきたいと必死だった。作文コンクールに出す作文も、毎年毎年、全力で書いた。誰もがベストを尽くすが当たり前前の環境だったこともあるが、僕の将来を考えて入塾させてくれた両親の期待にも応えたいという思いがあったからだ。

僕にとって、コンクール参加が最後となる今回。今まで以上に粘りに粘って書き上げた。自分としても悔いはないと言い切れる作文だった。それだけに、「最優秀賞」という評価をいただくことができ、達成感でいっぱいだ。

今こうして喜びに浸ることができるのは、お手本となった先輩たちや、競い学び合ってきた仲間たち、そしてこれまで厳しく指導して下さった先生のおかげだと、感謝の気持ちでいっぱいだ。

今まで母を怒らせることの方が多かった僕だが、久しぶりに母の笑顔を見ることができて、僕も今、素直に喜びをかみしめている。